



グと、日本におけるスロー・スターティングとの、鮮やかな対比(私たちにとつて無慘とさえ言えるほどのあまりに鮮やかな対比)です。アメリカ軍がベトナム民主共和国の都市(クアンビン州ドンホイ市)に対する挑発的爆撃を開始した二月七日には、即座に、ニューヨークの国連本部前と、トロント(カナダ)とで、抗議の大衆デモが起こっています。ドンホイ市が再爆撃されたよく二月八日には、国連本部前におけるアメリカ平和諸団体の共同デモのほか、モントリオール(カナダ)のアメリカ領事館前、ストックホルム(スウェーデン)のアメリカ大使館前、コペンハーゲン(デンマーク)のアメリカ大使館前において、それぞれ大衆ビケットが張られました。二月九日、ロサンゼルス(アメリカ合衆国)、サンフランシスコ(前同)、ローマ(イタリア)。二月十日、ジャカルタ(インドネシア)、デリー(インド)、カルカッタ(前同)、モンテヴィデオ(ウルグアイ)、ワシントン(アメリカ合衆国)、メルボルン(オーストラリア)、コペンハーゲン(デンマーク)、ローマ(イタリア)、フィレンツェ(前同)、パーミンガム(イギリス)。二月十一日、カンカイ(ラオス)、カリフォルニア(アメリカ合衆国)、ニューヘヴン(前同)、サンチャゴ(チリ)、ピサ(イタリア)、ジュネヴア(前同)。二月十二日、パリ(フランス)、グルノーブル(前同)、シュトラスブル(前同)、オスロー(ノルウェー)、ウィーン(オーストリア)、ヘルシンキ(フィンランド)等々。

〈体制間戦争〉の危険を目前の契機として、アメリカ帝国主義のベトナム反革命戦争に抗議する、諸国民の大衆的反応は、めざましく、爆発的にすらスタートした、と言うことができるでしょう。ところが、日本における大衆行動は、スターティングがきわめ

て遅かった。日本がベトナム侵略軍事行動の間接基地であり、ポラリス潜水艦の寄港基地であるにもかかわらず、抗議行動の起ち上りがきわめて遅れた、という事実を、私たちは残念ながら確認せざるをえません。日本における最初の大衆的抗議行動は二月十五日にいたって、アメリカ軍の直接出動基地である沖縄において、百五十名の集会・デモとしてようやく組織されました。本土における直接の大衆的抗議運動は、二月二十六日の、東京地評主催労働者集会(三千名)、あるいは、三月三日の、大阪天王寺共闘主催抗議集会(百五十名)を、待たなければなりませんでした。

申すまでもなく、わが国は、ヒロンマ・ナガサキ・ビキニの被災体験を持ち、ある意味では、その国民的体験を普遍人類的な平和価値にまで昇華してゆく大衆運動の上で、絶対的とも言える有利さを持っている筈です。現に五、六年以前までは、日本原水協一八・六原水禁世界大会という回路を循環する〈原水爆禁止国民運動〉によって、わが国は、沈滞した〈欧米平和運動を先進的に領導している観をさえ呈していました。その日本において、しかも、日米「安全保障」条約によってアメリカの〈核の傘〉のなかにしぼりつけられているという危険きわまる条件の下に置かれている日本において、佐世保を寄港基地とするポラリス潜水艦が東南アジア海域を遊弋し、核武装したアメリカ第七艦隊がベトナム海域を海上封鎖し、ダナン基地に原子曲射砲が持ちこまれる、という緊迫した状況にもかかわらず、それに対する大衆的攻撃が、欧米平和運動・AALA平和運動に對比して、最後進的なスロー・スターティングしか示しえなかった、という事実は、私たちの自省を深く促すものがあります。核戦争はこれを未然に防止する以外にはない、という第二次世界大戦後における平和運動の

一つの特質をなす自明な原理に、照らしてみた時、この大衆的平和行動の即発性・機敏性の欠如の問題は、単なる偶然の結果や技術的遅速の問題として軽視することはできません。

あえて言うならば、このスロー・スターティングによって、わが国の平和運動を（とくにこの数年來冒してきた病患の実態が、はしなくも露呈された、と言うことができます。岡村昭彦さんの『ベトナム写真集』や開高健さんの『ベトナム戦記』の（流行）にも示されているように、この間の、ベトナム問題に対する日本人の関心や心理的反応が、かならずしも遅鈍でも狭小でも稀薄でもなかった事実、を思いあわせるならば、大衆的平和行動のこのスロー・スターティングには、日本平和運動の現在の体質とくにその大組織的指導の病理現象が如実に顯示されていた、と言わなければなりません。革新諸政党をはじめとする大組織の私有領地化・系列化に冒されてしまった、わが国の（原水爆禁止国民運動）の内的空洞化・無力化の度合が、どの程度の惨めさにまで達しているかを、それはまさまざと示しました。ベトナム危機が顕わにしたものは、今日の日本平和運動の主體的危機でもありました。

わが国の革新諸政党をはじめとする大組織の指導、政党本位に系列化された各原水爆禁止運動の中核部が、こうして、幹部抗議・決議・声明・打電・抗議文手交程度 of 自慰的 self 運動以上には出られずに、指導麻痺・行動不能のインポテンツ状態に陥っていたこの重大な時期に、市民社会深部からの広汎な関心・反応は、個々の自然発生的なセルフ・スターティングとして開始されました。W・F・P（平和のために歩こう）の五名の市民が、日比谷公園とアメリカ大使館付近を（セツケン・デモ）したのが、三月十九日。同じく三名の市民が、（銀ブラ・デモ）を行い、「世

界民衆平和を結ぶ会」の世界民衆ベトナム平和要請署名運動が、渋谷駅前で開始されたのが、三月二十日。二十二名の市民が東京駅周辺で（ハンソンドイツマン・デモ）を行い、「アメリカの北ベトナム爆撃に抗議する市民有志」のよびかけた自発的抗議デモが三百名を結集したが、三月二十五日（同じ頃、三月二十四日には、アメリカ合衆国のミンガン大学で、創意的な行動形態（ティイチ・イン）が初登場しました）。

上からの系列スイッチだけに依存する大組織の形骸化した平和運動が、スロー・スターティングでもたもたしていた時期に、その解体過程の逆イデオロギー表現である（自立主義）によってもなお分解しきることのなかった究極のもの——市民個人の自発的主体性において、下からの散発的なセルフ・スターティングが発動してきたのでした。この「市民有志」のセルフ・スターティングは、（欧米平和運動ではむしろそれが常態ですらありますが）、従来の日本の「国民運動」や「共闘組織」には本質的に欠如しがちであった自発的始動形態であり、そのようなものとして、四月二十二日の「ベトナムの平和をねがう市民の集会」（八百名）、四月二十四日の「ベトナムに平和を！」市民・文化団体連合の集会・デモ（一千五百名）を誘導する始動力となったのでした。そして、ベトナム戦争反対運動の第一段階において、このような（市民民主主義的運動）が、六・九国民行動日をひきたし、成功させる有効な側翼となったことは、ここに改めて強調するまでもないことでしょう。この具体的効能を、市民主義の限界や自然成長性の限界の一般的指摘によって没却することは、できないことです。ある意味では、特殊な歴史的条件と機会を巧みに把えて、革新系大組織の多くの部分を「一日共闘」に動員することができ

た、端緒としての「五名の文化人」のイニシアチヴそのものも、セルフ・スターティングな市民的主体性に基づいた創意にはかならなかつたのです。

私はこの小論においては、限られた紙数の関係上、こうした「市民主義的」な平和運動は、六・九以後の第二段階においては、革新諸政党をはじめとする大組織の「国民運動」のなかに、単純に急速に解消（あるいは止揚）されてしまうものであろうか、という私自身の疑問、ならびに、大組織平和運動と市民主義運動との重層的複合の問題は、わが国では安保反対闘争以後（とくに「安保反対共闘会議」の瓦解以来）顕著に私たちの意識に上つてきた問題であるとはいへ、単にわが国の今日の時期にだけ偶有の問題（いわば便宜の問題）なのであろうか、という私自身の疑問に導かれて、欧米諸国の最近の平和主義的・市民主義的な平和運動のあり方についてだけ、若干の検討を試みてみたいと思ひます。

四月二十四日の「へへ平連」集会においてアメリカ平和運動を代表して戦闘的挨拶を行い、五月二十二日の画期的な「ベトナムの日」日市民共同行動への道を開拓した、S・P・U（学生平和同盟）の若い活動家「フィリップ・G・アルトバツハ」は、「アメリカ平和運動の特色」のなかで、「一九四九年から一九五九年までの十年間は、アメリカの自由主義者や進歩主義者にとって暮しにくい日がつづき、平和運動も困難な時期であった」と回顧しています。アメリカ平和運動の十年間におよぶこの沈滞が打ち破られたのは、まさに一九六〇年二月一日、ノース・カロライナ州グリーンズボロのキャプテリヤに、黒人差別に抗議する学生が、

非暴力的な直接行動「シット・イン」を敢行したことに、端を発しています。ジャック・ニューフィールドの最近の論評「学生左翼」が描いているように、「豊かなアメリカ」の不妊の胎内から生れ出たこの急進主義の新しい世代は、今日、ワシントン大行進を組織できるまでにぐましい成長を上げていますが、直接には労働組合運動や共産主義運動の外で、しかも、三〇年代以来の伝統的急進主義者（たとえばマイケル・ハリントンやジョン・ローク等）とも一応切れたところで、「新民主主義者」としての彼らの運動を展開してきたわけです。この「まぎれもないアメリカの新左翼」をはぐくんだものは、マルクス、トロツキー、スターリン、シャハトマンではなく、カミュ、ポール・グッドマン、ボブ・ディラン、そしてSNCC（学生非暴力調整委員会）である、とニューフィールドは指摘しています。「指導者なんていらぬ」と好んで唱う彼らの組織—SNCCは、クエーカー式の完全合意方式によって運営され、会員を持たずに要員だけを持っているような「組織」なのです。SNCCのすぐれた指導者ボブ・パリスは、ことしの二月、「ヘーゼ」という有名なベンネムを捨てて、バーミンガムに移住することによって、指導者の地位から自ら「亡命」した、と言われています。「底辺の人びとはまったく指導者を必要としない。彼らが必要としているのは、自らの価値についての自信であり、自らの生活について決定を下すための「一貫性なのだ」というボブ・パリスの言葉は、新しい世代の哲学は「人間主義的無政府主義」である、というニューフィールドの意見を、よく裏書きしています。SNCCは、反共や容共であるよりもむしろ「非共」なのです。

C・T・R（三重革命委員会）によって全体的行動の調整をは

かっている、新しい六〇年代世代的知的反乱は、アメリカ合衆国における「成功とよばれる静かな絶望」に対して向けられ、資本主義と国家の変革そのものを目標とするにいたっています。労働組合運動(AFL-CIO)や革新政党運動(社会党・共産党・トロツキー派)とは結びつきがほとんどないところから発生しており、労働運動よりは黒人公民権運動からの豊かなエネルギーと創意的行動形態を汲みとっています。「三重革命」とは、周知のように、黒人問題・平和問題・オートメーション問題の三重課題を意味しますが、ワシントン二万人行進を指導したS・D・S(民主的社會のための学生連合)の委員長ポール・ポッターが、日米共同行動「ベトナムの日」、カリフォルニア大学(バークレー)の「ティーチ・イン」において行った演説は、黒人公民権運動とベトナム戦争反対運動との複合(一般化して言えば、市民民主主義的権利と反戦平和との結合)をみごとに喝破しています。「ベトナムにおけるアメリカの殺人行為と、南部における白人の黒人に対するテロは、同じことなのだ。アメリカは、ベトナム人の運命を、彼らに代って定めようとしている。同じように、南部の白人は、自分らが黒人の運命を定めるのだと思っている。この意思決定を行っている連中、この巨大な官僚制、これをわれわれは検討し、研究し、変革しなければならぬ。さもないと、この怪物はわれわれを亡ぼしてしまうだろう」。「ティーチ・イン」という新しい平和行動形態そのものも、黒人公民権運動における「シット・イン」「ライ・イン」「ショップ・イン」等の非暴力的抗議戦術の発展にほかなりません。

やはりカリフォルニア大学の「ティーチ・イン」において演説した、ノーマン・メイラーは、ジョンソン大統領の小さな肖像切

手を何百万枚と国中に逆さまにして貼りつけることを提唱し、「アブサイド・ダウン! アブサイド・ダウン!」と連呼しながら降壇したそうだが、新しい(冷戦後)世代的直接の先任者がもしいるとしたならば、それは、ブルジョアの二大政党下のアメリカ型労働組合主義者でも三〇年代以来の伝統的急進主義者でもなく、むしろ、メイラーがかつて「未来の哲学」のひとつであると推賞したアメリカ的実存主義の担い手「ヒップスター」であるにちがいない。「それは、原子戦争による即死や、巨大な強制収容所にほかならない国家による比較的早い死、またはいっさいの創造的・反逆的本能を絞め殺された順応精神による緩慢な死(これが精神や心臓・肝臓・神経などにどんなに有害であるかは、どこかの癌研究所でもすぐには発見できないにちがいない)とともに生きることが、われわれ全体の条件であり、青春期から、まだ時いたらぬのに老衰してしまうまで、こうした死とともに生きることが、二十世紀の人間の運命であるとしたら、生命の糧となる唯一の答は、死の条件をうけいれ、身近な危険としての死とともに生き、自分を社会から切り放し、根なし草ずらとして存在し、自己の反逆的な至上命令への、地図もない前人未到の旅に立つことだということを自覚している人間である。……ひとはヒップになるか、スクエアになるか(アメリカ生活に入ってくる新しい世代は、すべてどちらかひとつを選ばなければならぬことを感じはじめている)、反逆者になるか、順応主義者になるか、アメリカの夜の生活の荒野の西部の開拓者となるか、それともアメリカ社会の全体主義的組織の罫におちて、成功するためにはいやおうなしに順応しなければならぬ運命にあるスクエアの一細胞となるか、である。……ヒップの起源が黒人であること

